新春巻頭言

エコバランス国際会議20周年の年を迎えて

We are in the 20th Anniversary of the International Conference on EcoBalance

日本LCA学会会長 原田 幸明¹President of the Institute of Life Cycle Assessment, Japan, Kohmei HALADA¹

2014年はエコバランス国際会議20周年の年です。第1回エコバランス国際会議は1994年10月25日から27日にかけて(社)未踏科学技術協会、(社)環境情報科学センター、(社)産業環境管理協会の主催と、当時の科学技術庁、環境庁、通商産業省の後援と33関連学協会の協賛の下に当時の科学技術庁金属材料技術研究所の大会議室で開催され、Dr. Boustead、Dr. Kluppelなど今や懐かしい草分けの人たちをゲストに招いて、15か国260名の参加で開催されました。その前年の1993年はISOにおいてTC207でLCAの標準化作業が開始され(発行は1997年)、翌年の1995年には日本LCAフォーラムが設立されて日本の産業界が本格的にLCAへの取り組みを開始する、まさに世界においても日本においてもLCAが社会的存在になる、その段階にエコバランス国際会議は産声を上げたのでした。

ここで、これまでのエコバランス国際会議の取り組みをそれぞれのテーマと参加者、発表件数の規模で振り返ってみると以下のようになっています。

- 第1回 材料と技術開発のためのライフサイクルアセスメント
15カ国 260(国内219)名 64(国内41)件
- 第2回 LCAの新しい展開 13カ国 357(352)名 129(89)件
- 第3回 持続可能な社会に向けてのLCAの展開 23カ国
423(352)名 138(87)件
- 第4回 持続可能な新世紀における意思決定と実践のための方法
23カ国 464(401)名 206(127)件
- 第5回 環境調和型社会に向けた実践と評価基盤の再構築
22カ国 448(355)名 266(168)件
- 第6回 ライフサイクル思考に基づくエコバランスツールの育
成と体系化 26カ国 406(301)名 221(163)件
- 第7回 私たちの将来社会をシステム思考で設計する
21カ国 366(287)名 240(163)件
- 第8回 The challenge of creating social and technological
innovation through system-thinking
30カ国 406(275)名 235件
- 第9回 Towards & beyond 2020 30カ国 380(249)名 251件
- 第10回 Challenge and solution for sustainable society
23カ国 305(201)名 256件

時代の流れを反映して第1回はLCAは何に使われるかから始まったものが、ISOによる標準化を踏まえて、さらに次の展開は何か、この評価のツールを実践や意思決定、ソリューションに結びつけるには何が求められているかを追求していく歴史だったことが、このエコバランス国際会議のテーマをみていくとよくわかります。なお、日本LCA学会が一括してこの国際会議を運営するようになった第8回からメインタイトルは英文だけになっており、国際的な集まりの場として位置付けようと

いう意図が表れています。

20周年を迎える今年のエコBalance2014は10月27日から30日につくば市で開催され、そのテーマはCreating Benefit through Life Cycle Thinkingで、この20年を振り返りつつ将来の展開を論じる企画などが計画されているようです。

この20年はLCAが国際的にも産業界でも社会的に取り入れられ、Life-cycle thinkingがもはや目新しい視点ではなく、環境と持続可能性を論じる上で当然の視点となったというだけでなく、社会・経済的にも大きな変化が起きています。科学的認識においても、1994年はIPCCでさえ第一次報告で「観測により温室効果の影響を検出することは10年以上かけてもできないだろう」と慎重な態度をとっていた段階でしたが、今や、昨年の第五次報告で「人間活動が主な要因であった可能性が極めて高い」とまで指摘するようになっています。社会・経済的にはBRICsのみならずMISTやVISTA、ネクスト11など新興諸国の経済活性が大きくなり、そこに中国が世界の工場として席捲するなど、20世紀末の日欧米の三極構造からの大きな変化が起きており、その中で資源やエネルギーが金融商品化して実体経済が不安定になる構造も生まれてきています。

振り返ってみると前世紀の末に生まれたLCAは、当時支配的であった日米欧の相対的に成熟した消費構造の中で、まだ不確定な認識でしかなかった環境問題に対して新たな意識を顕在化させ、飽和感のある消費行為に対して環境問題をビジネスとして取り組んでいく機会を造るという意味でひとつの役割を果たしたのではないかと思います。大胆に言わせていただくと、中間所得層の「原罪」意識的なイデオロギーもLife-cycle thinkingが普及するうえで大きな役割を果たしたのではないかと思います。

ここで、この20年の変化と将来をみていくと、これから人口的にもそして経済的、環境的にも影響力を持つ国々にとって果たして定常のフローをベースにした手法が果たして意思決定やソリューションに有効なのか、そのような問題意識も持ちながらLCAやほかの環境影響定量化手法を使いこなして発展させていくことが必要ではないかと思っています。これから影響がますます大きくなるアジア的な感覚からすると「公共」「調和」「ストック」など、実践や意思決定に向けて組み込まれるべき要素がまだまだ残されていると思います。

第1回エコバランス国際会議を開催した当時、私たちは「LCAはまだ発展途上の手法である。LCAで何が環境に良いかわかるのではなく、環境に良い行為を説明し議論するためにLCAはあるのだ」ということを繰り返して言ってきました。20年たってもこのことだけは変わっていないと思い、その視点からのさらなる発展を期待しています。

¹ 独立行政法人 物質・材料研究機構 / 〒305-0047 茨城県つくば市千現1-2-1

¹ The National Institute for Materials Science / 1-2-1 Sengen, Tsukuba, Ibaraki 305-0047